一六世紀末「日本図」に見る北方地名

長谷川　成一

本稿でとりあげる一六世紀末「日本図」は、日本側で制作した「河盛氏蔵屏風日本図」（以下、「河盛氏日本図」と略記する）と、外国で制作された天理図書館所蔵「イタリア古写図」（以下、「イタリア古写図」と略記する）である。この両「日本図」には、日本北方地域の地名が従来の日本図とは比較にならぬほど多く、しかも具体的に記載されている点に大きな特徴が認められる。すなわち、当時の人々の地理観・世界観を反映した両「日本図」のなかで、日本北方地域がどのように視覚的に認められ、いかなる認識の下に北日本の姿が意識されたのか、それを考察することは当時の国家領域・国家観をうかがううえで不可欠のことと考えるのである。

両日本図についての代表的な解説・研究は、中村拓「戦国時代の日本図」（『横浜市立大学紀要』第五八号　一九五七）、岡本良知『十六世紀における日本地図の発達』（八木書店一九七三）があり、また最近の研究成果としては、とくに「イタリア古写図」を子細に論じた高橋正「西漸せる初期日本地図について」（『日本学報』第四号　大阪大学文学部日本

研究室　一九八五）がある。本稿では、紙数の関係上、これらの成果に依拠した個所はとくに出典を明記しなかった。またさまざまな絵図・地図を集成して編集した『日本古地図大成』（講談社　一九七八）所収の両「日本図」も、本稿の記述にあたって参照したことを断っておく。両「日本図」について、簡単にふれておこう。

「河盛氏日本図」

同日本図について中村氏は、従来の日本図である行基図を基本としつつ、地名をその図中にきわめて多く記載している点において、同様のいわゆる初期南蛮屏風日本図である浄得寺図、池田氏図、河村氏図などとは異なった特徴を有し、これらの日本図が嫡流とすれば、「河盛氏日本図」は庶流に属するものという。記載の地名は、江戸時代以前に著名であって、江戸時代に入ってからすでに滅びたいくつかの地名が記されており、それらは室町後期からの地名とともに、肥前名護屋の地名が見えることにより、一五九二年（文禄一）あたりまでの状況を示しているという。ちなみに年代を特徴づけるものとして、一五九〇年（天正一八）・九一年の奥州一揆に関する多くの地名が、この図に見られるとしている。中村氏は、室町時代に同日本図の原型があって、それに書き加えられた結果、現在のような「河盛氏日本図」が完成したとしているが、岡本氏はそれに反論し、そのような

原図は存在せず、同日本図は桃山時代の末に前代以来世に知られた地名をのせて制作されたのであり、以前に知られた地名が交じっているからといって、早くあらわれた地名の時代まで制作の時代をさかのぼらせるのは間違いであると述べた。筆者も岡本氏の指摘に賛同するものの、とくに「河盛氏日本図」を特徴づける、天正末年（一五九一）の北日本の地名とその特徴について、中村氏や岡本氏の見解をいま一度検討する必要があるのではないかと考えるのである。

「イタリア古写図」

同日本図は、一五九〇年（天正一八）七月にイエズス会巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーニや天正遣欧使節の一行とともに長崎に到来し、一五九二年一〇月、マカオへ去る間、日本の地理について探索し、日本地図を作成したことが知られているイナシオ・モレイラの手によるものであるといわれる。この間の事情やモレイラの伝記については、岡本氏の著述に詳しいので参照されたい。モレイラの手になる日本図は、モレイラ図としてひろく知られ、この「イタリア古写図」も同図の筋のよい写本の一つである。中村氏は、「河盛氏日本図」の地名と「イタリア古写図」に記載されている地名とを詳しく検討して、多くの重なりあう地名から両図は時代的に非常に近いものであり、相互にきわめて近い伝

承の関係があるらしく考えられると述べ、高橋氏の論稿においてもそれに賛意を示している。ただし東北地方の地名についてみた場合、「イタリア古写図」は「河盛氏日本図」の約二倍の地名が記入されていることに注意を喚起しておきたい。なお高橋氏は「イタリア古写図」の制作年代について考証をすすめ、一五九一～九六年（天正一九～慶長一）のほぼ五年の間にできたものであると推定している。

「河盛氏日本図」と「イタリア古写図」に見る北方地名の特徴

両「日本図」に記載された地名は基本的に同様の性格のものであるという点で、中村・岡本・高橋三氏の見解は一致している。とくに奥州の地名に関しては、中村氏の見解を全面的に踏襲しており、そこには何ら疑問がさしはさまれておらず、最新の研究成果である高橋論文においても、北方地域の地名に関する考察はまったくなされていない。筆者は、とくに両「日本図」における北日本の地名をとりあげ、その特徴を把握することにしたい。

「河盛氏日本図」に見える北日本の地名は、出羽国が六、陸奥国が二四で、国名を除けば全部で三〇の各地名が記されている。このうち現地名に比定できないのが八地名、陸奥国に比定不能地が集中している。出羽国では、南から「米沢」、「庄内」、「屋縣」（大宝寺）、「安子津」（赤宇津・赤尾津・赤宇曾）、「秋鹿」（男鹿）であり、「日山」（檜山）は陸奥国

に描かれている。一方陸奥国では、現地名に比定可能なものを南から列挙すると、「安子島」、「二本松」、「尾森」（大森）、「白石」、「渡」（亘理）、「岩沼」、「シオカマ」（塩釜）、「八幡」、「松島」、「磯崎」、「薄衣」、「尾原」（大原）、「ソトノハマ」、「ツカル」である（日山は、右に触れたように陸奥国に描かれているが誤記と思われるので、本稿では出羽国の地名として検討する）。

出羽国の特徴をあげると、次のようになろう。中村氏以下各氏が指摘するように、同日本図が室町末期から一五九二年までの地名を記しているという点は大筋では間違いがないものの、とくに東北地方の日本海側地域を見れば、さらに異なった視点が出てこよう。周知のごとく「米沢」は伊達氏の居城、「庄内」は最上氏と大宝寺武藤氏（後には上杉氏）とがその領有をめぐって死闘を繰りひろげていた地方である。「屋縣（やかた）」という地名は存在しないが、これは大宝寺武藤氏が当時「大宝寺ヤカタト云テ家高也、コトニ義氏ハ名将ト云々」（「湊・檜山両家合戦覚書」）と称されていたことから、武藤氏が拠った大宝寺であることが判明する。武藤義氏は一五八三年（天正一一）に近臣前森氏に攻撃され自刃しているが、上杉氏の後援により武藤氏は形だけでも再興され、最終的には一五九〇年の藤島一揆煽動の罪によって武藤義勝が配流になるまで（『山形県史』第一巻）、「ヤカタ」あるいは「屋縣」の呼称は継続していた可能性がつよい。ただし「イタリア古写図」では、この「屋縣」を大宝寺と記していることに注意すべきであろう。

「安子津（あこうづ）」は、由利郡の北側日本海沿いの地域をさす中世以来の地名である。「湊・檜山

両家合戦覚書」によれば、由利一二頭のうちでも「赤尾ッ一ノ頭也」とあって、郡内随一の勢力を有する国人の名称であった。一五九〇年一二月二四日、仁賀保氏をはじめとする由利郡内の小領主が、豊臣政権から知行安堵状を下付され（「仁賀保家文書」）、赤尾津氏も同様に知行を安堵されたことは確実であり、その領知高は、およそ四五〇〇石前後ではなかったかと推定している（『本荘市史』通史編Ⅰ）。

「秋鹿」（男鹿）、「日山」（檜山）は、周知のごとく安東氏の勢力圏を示唆するものであることは間違いなく、また男鹿の脇本城と檜山の檜山城は、檜山安東氏の主要な居城であった。この両城ととくにかかわりが深い歴史的なことがらとしては、一五八九年（天正一七）の檜山安東氏と湊安東氏の両者の戦いであろう。この戦争に勝利をえた檜山安東氏の当主安東実季は、いよいよ秋田地方の支配を確固たるものとしたのであった（「湊・檜山両家合戦覚書」）。「イタリア古写図」では、秋田県内の地名が「安子津」と「秋田」の二つになっており、「秋鹿」「日山」の地名が消失したのは、安東氏領内でこれら両地名の重要性が喪失したことを物語っていよう。

以上、「河盛氏日本図」に見える出羽国の地名は、総じて一五八九・九〇年にいたる期間にあって歴史的に重要なものが多く、その点で「イタリア古写図」と一線を画するものがあるのではないかと推察される。

次に陸奥国の地名については、紙数の関係から簡単にまとめ、「イタリア古写図」との関係についての見通しを述べるにとどめたい。前述のごとく「河盛氏日本図」には、「陸

奥」の国名のほかに、二四の地名が記載されており、そのうち同国の最南端は「安子島（あこがしま）」であって、これは現在の郡山市のうちに比定され、一五八九年（天正一七）の伊達政宗による芦名氏攻略によって、伊達領となった地域である。この「安子島」は城の所在地であるとともに、芦名氏攻略の重要な地点であった。一方、「ツカル」「ソトノハマ」などを除いた最北端の地名「尾原」（大原）は、現在の岩手県東磐井郡大東町に比定され、葛西氏の支配の下にあったが、同郡の「薄衣（うすぎぬ）」とともに葛西氏の重臣の所領であった。戦国期の葛西氏は、一五七七年（天正五）ごろから伊達氏によしみを通じ、八九年に伊達氏の軍門に下った大崎氏とともに、伊達氏の「馬打同前」と称されていたという（『伊達家文書之一』四一二号）。すなわち八九年ごろには、葛西・大崎両氏は伊達氏の軍事的指揮下に編成されていた。このように、「河盛氏日本図」に見られる陸奥国の地名は、当時国家の境界域であった「ツカル」や「ソトノハマ」を除けば、すべて伊達氏の支配の及ぶ領域に限定されており、一五八九・九〇年に最大の支配地域をもった伊達氏の版図を描いたものといえよう。したがって一五九〇～九一年にかけて勃発した葛西・大崎一揆にかかわる地名（たとえば一揆衆がたてこもった城名など）を描いている「イタリア古写図」とは、その傾向を著しく異にしている。

「河盛氏日本図」は、東北地方の場合、出羽国では一五八九・九〇年における武藤・最上・赤宇津・安東各氏の勢力の競いあう場を、陸奥国では同時期の伊達氏の勢力圏を描写したものとみなしたい。紙幅も尽きたことから、「イタリア古写図」を検討する余裕がな

いので、それについては別稿に譲りたい。